

生いたやう。

紳士は通りへ出るや否や、直ぐ又其の通りを横截つて、是ばかりは美しい、青柳の下を搔潜ると、小さいが庫のある、門構の家の前を、足早に衝と入つた。と、

「おや、」と突然見咎めたのが美人で。小聲に、

「小母さん、入らしつてよ、」

と云ふと、

「何うもお邪魔様でございます、」とばかり。険のある目に莞爾と笑つて、ついと張板の彼方へ廻つたが。露地が狭いので退けやうとする。

と、紳士は軽く會釋をしながら、其傍を通り抜けたが。

直ぐ右隣の門構、表札に「森山芳子」とある下を、潜戸をがらりと開けて、身を屈めて、衝と入つた。

女は張板を縦に抱へたまゝ、茫然と、其の後姿を……。木戸が閉つて了つて後、も、猶夢る如く恍惚と眺めて居たが。

唐突に、

「何だねえまあ、お前さんは？」

と引叩かれて、ハツとなつて、我に返ると、

「勝ちやんに言付けてよ！」

と言ひ捨て、婆は手を拭き、隣家の露路へ駆込んで行く。

女は又張板を舊の處に置くと、力ない嘆息を嚙と。其のまゝ格子の中へと入つたが、上框に腰を掛けたまゝ、恍惚と露路の空を噴める……。

世は様々(二)

「豆腐い、豆腐い………」

「屑やお拂ひはございませんか、屑やお拂ひはございませんか、屑い、屑い。」

と商賣物の古帽子を目深に、秤を入れた屑籠を肩にして、胡散臭い男が通り抜けて行く。

と又、その後から、女の齒入屋が、片手に唐天の太い鼻緒、赤いのだの、青いのだの、紫のだの色々下げて、片手に荒縄で結へた足駄、日和下駄の、泥だらけの汚いのを、幾足かぶら提げて、姿にも似ぬ優しい聲で、

「今日は、足駄の齒入はございませんか。」

何處かで鶏の聲がする。

「コケコツコ。」

厩橋の汽笛が鳴る。ポー。べちやくちやべちやくちや女が饒舌くる。向家の屋根で雀が囀る。又煮豆屋が来る。ちやりんく、

「えい、豆やア富貴豆引辛子漬に梅干引、えい、豆の大安賣でござい。」

鐵葉屋で鐘が崩れる。ぐわちやくぐわちや！水道の水を汲みに来る音がする。ザア。溝板を駈出す音がする。ぱたくぱた。隣家の格子の音がする。がらくから。誰かい洩をかむ音がする。チン。續いて八百屋が来る。薪屋が来る。酒屋が来る。掃除屋が来る。然かも暫くも止む間がない。……

噫、噫、噫！日かな一日此の騒ぎだ。

那やつて、今打遣られて行つた男のやうに、

「富山の薬屋でございませうが、又新規に賣弘めを致しますので、」

なんて、家業とは云ひながら、恁處處を一軒々々、一々腰を折つて頼んで歩くやうな、意氣地ない男もあるかと思ふと、又、あれ、那處へ、子供を背負つて、豆腐なら二帖三帖しか入らないやうな、小さな岡持を一つ下げて、

「豌豆まあ煮立え、豌豆まめ煮立え。」

と呼んで行く。見慣らしい女もある。

氣の毒な、御亭主が、餘程の意氣地なしか、長煩か、出稼にでも行つてゐるか。

年紀もまだ若いやうだけれど、毎日のやうに那遣つて、今時になると必然来る。

同じ人間と生れながら、ま、何たる相違だらう？

熟と見送る目の中へ、又映じたは、兀頭の爺さんである。

然かも腰の曲つたよぼよぼのが、格子戸から中を覗き込んで、

「今日は、羅宇の替換はございませんか。」

女は、

「はい、ございませんよ。」

と言つたが、其聲は鋭かつた。

爺さんは驚いて出て行く。

女は後で、あゝ、年寄に邪慳な、止せば可かつた、とおもつたが、別に悪氣があつて言つたのではない。面倒臭くつて突慳貪に言つたのではない。

那の年で、何も、羅宇屋なんぞ、しないだつて可さうなもの。否、孫子の一人や二人は、無くてはならない年だのに、何爲その孫子が働かないのであらう？ 痛ましい。と、思つたから、つひ邪慳にも言つたのである。

又少年の油屋が来る。

「油屋でございー」

「あ、可くてよ。」

その後へ又讀賣が入つて来る。拍子木の音、カチ、カチ、カチ。

「此度銀座の丸屋に於きまして、御大典の記念として、賣出しましたる巻苧、今日は皆様へ、廣告の爲定價の半額、甘本入が纒に四錢……」

言ひも畢らぬ内に又格子戸が開いて、

「御宅ちや牛乳は召上りませんか？」

「はい家ぢやア飲みませんよ。」

「又何うぞ願ひます。」

女は、

「あ、もう、可厭ー」

と言つて、長火鉢の前へ行つて、肱枕をして目を塞つた。が、耳が聞える。

又格子戸がガラ／＼ガラ。

「炭屋ですが、精々お安く致して置きますが、」

今度は黙つて寝た振りをして居る。と、頻りと聞ともない大儀の講釋を、喋々ど説いて居たが、いつまで経つても返事をせぬので、旋て諦めて去りもあへぬ内に、
又、

「御免下さいまし。」

「はい、誰方、」

と慌て、起返つて見ると、

「旅の者でございませすが、途中で難病に罹りまして、此通り難儀を致しまする、國へ歸らうにも歸られませす……」

此方の知つた事ではないと思つたが、黙つて長火鉢の抽斗を開けて、紫縮緬の財布を出すと、中から五錢の白銅を一つ、坐つたまゝ投出して遣る。

と、白銅は板敷をころ／＼ころ、土間へ落ちて、ちやりんと鳴るのを、蚤でも掴むやうな穢らしい手付で、

「はい／＼はい、是は早や何うも、」と言つて拾つて出て行く。

その癖、未だ立派に働けさうな若者。態とでももあるまいけれど、いやに着物をだらしなく着て、海布のやうな帯を占めて、薙刀のやうな藁草履を穿いて、入る時はよぼよぼよぼ、出る時は、元氣好く、憎らしいたらありはしない。

「姉ちゃん、姉ちゃん、姉ちゃん、姉ちゃん。」

「何だよ、可煩い、何だよ。」と言へば、遠慮會釋もなく這上つて来て、今年五つになる右隣の可愛ゆくもない女の兒が、長火鉢の前へ立はだかつたまゝ、

「あのね、お母ちゃんがね、姉ちゃんにね、蟹のいゝのが参りましたが、如何ですつて？」

と口だけは達者なもの。

「今日はまア止ませうつて然う言つて頂戴な。」

「あい。小父ちゃんは？」

「居なくつてよ。」

「何？ 那處にあるのは？」

と持佛堂の中をじろ／＼見る。女は意地の汚い子だと思ひながら、振返つて其方を見ると、

「花だよ、椿の。」

と思はず笑つた。が、子供は、

「然う、」とばかり、満らなさうに、チヨコ〜と出て行く。

「小母さんまでが何をしてるのだらう、もう出て来さうなものだけけれど……」

「おや、又来たよ、可煩いね。」

「鹽やあーい鹽。」

「七色唐辛子。」

ハツ 當リ

女は今店端へ出て、障子を開けて、又露路の空を見て居る。

「全體那の厩橋の煙突からして氣に喰はないよ。何うだらうまア那の色の黒い事……。折角の好いお天氣も何も、あれで以て臺無しにして丁ふのだよ。宛で以て黒

雲のやうだわ。黒雲ならまだ我慢も出来るけれど、あれが皆石炭の煙なんだからやり切れない。うつかり白い物なんぞ乾して置かうものなら、油煙のやうな細かい煤が、ばら〜ばら〜降つて来て、眞黒に汚して丁ふ。おや何處まで續くのか知ら。湯島の天神様の上までも行つて居るよ。」

ふと目に留つたのは、今しがた、唐辛子屋が手の付いた小さな抽斗のある箱を擔いで、賣れなくて出て行つた、露路の角の小さな土藏。

「何も那麼、壁の落つた、壁コマの出た土藏なんぞ、一生懸命になつて大事にして、突支棒なんぞ立てとかないだつて可さうなものぢやないか。

ないから負惜みを言ふ譯ぢやないけれど、那麼藏なら持つてない方が可い。ない方が餘程氣が利いてる。火事の時なんか何うする氣なんだらう。質屋の癖に、他事ながら氣になるよ。

尤も近所から入れに行くものが、ハツビにズンドに温袍に提灯、車の膝掛、チャ
プ臺、飯櫃、下駄に、蒲團に、箱火鉢、ちやあ、あれだつても澤山だけれど。』
と又露地の外側を見て、

「何とか云ふ、氣障な、太好きな、落語の貧い。男の癖に、何處かの後家とかを
引掛けて、財産家になつたとか云ふ、那の落語家の建てた長屋にさへ、住つてる者
がある……………」

突當りの仕立屋だつて、木戸の柱に御仕立物所なんて、眞面目さうに看板こそ出
して居けれど、内證は監視付の持兇器強盗で、御亭主はつひ此間まで、巢鴨の監獄
へ往つて居たのだ。

又あの隣家の洗張屋では、三疊と六疊限の、那麽狭い家に居ながら、親子總勢六
人暮しで、子供は挽物細工へ行つてるさうだけれど、大屋さんの話で聞けば、屋賃

を何でも十ヶ月とか溜めて、店立を食はさうと思へば、甘兩の引越賃をくれなけれ
ば、何うしても動かねえなんて威張つてるさうだ。

又其隣の齒醫者の家では、亭主が田舎の旅商人で、鎮守様のお祭や何かに、齒磨
を賣つて歩いてるさうだが、舊は弟の女房だつたとか云ふ、那の菊石面の女房が、
今年生きてれば、三つになる兎兎の女の子を、食ふに困るからつて干乾にさせて、
殺して了つて、田舎の畑へ持つて行つて、知らん顔をして澄して居る。

向うの長屋のランプの笠屋の女房だつて、何も子供の七人も育てゝゐる母さんで
居ながら、誰にでも見えるやうに、那麽高い廂の上へ持つてつて、あんな物を乾し
とかないだつて可いぢやないか。

又其隣の鐵葉屋の亭主だつて、偶にや女房も可愛がつて遣るが可い。幾ら女房が
肺病で寝て居るつたつて、達者な内は子供の二人も拵へた中ぢやないか。何うせ一

度は死ぬ體だ、いつまでもその體で、ごほん／＼咳ばかりして、生きて居るくらゐなら、早く死んじまふが可いとは餘りだ。

又其隣の娘だつて、お父様が毎朝々々、印刷局へ通つて居るのに、廿歳にもなつてゐて、日がな一日、ペコン／＼、可煩ツたらありはしない。

聞きやア公園の活辯になんぞ、小娘の癖に逆上せ上つて、お父様の折角娘が可愛いばかりに、稼ぎ溜めた、纒かばかりの溜金を盗み出して、やれ中折を買つて遣つたの、お鮎を御馳走してやつたのと、呆れ返つて物も言へやしない。』

女は座敷へ引返して来て、長火鉢の前へ坐ると、又一服吸付けた。

何か知ら氣を紛らさうとしてゐるのである。

思ひ出

何でも小母さんの話で聞けば、

『つひ此間までは番町の方に、お家をお持ち遊ばしてお在なすつたのが、番町ではお役所にも遠し、旁々人目に懸らぬ處を云ふので、以前私の娘が御奉公に上つて居たので、お前の近所に何處かないかと、お嬢様が有仰つたので、早速尋ねて上げました。』

先方様の御身分は、明ら様には云へないけれど、旦那様もお若ければ、お嬢様もまだ若い。而して、兩方戀仲で、今が油の乗り盛り。それなのに、お可哀さうに、お母様のお許がないので、思ふやうには逢ふ事も出來ず、漸う私の娘が勧めて、向

島には、音楽の先生も被在るから、その方の處へ通ふのに、不便だからと有仰つて、私の近所へお越しなさいまし。と申上げたのでお借りになる事になりました。』

と云ふから然うかと思つて居たが……。

似て居る、似て居る、似て居る、似て居る。……何うしても然うに違ひない。』

女は衝と奥へ駆け込むと——奥と云つても二間限だが——總桐の筆筒の上に、順序よく並べてある、小筆筒の抽斗を開けて、古びた一葉の寫眞を出して來た。それには中學生の制服を着た、まだ若々しい少年の像と、お下げに結つた愛くるしい少女の像が寫つてゐる。

女はその寫眞を見ると、そのまゝ無意識に筆筒の前へ丁と坐つて、やゝ、暫く熱と見入つた。

が、ふと、『思ふまい、思ふまい、』と獨言のやうに言つて、又その寫眞を小筆筒の

抽斗へ入れると、今度は立ちながら考へて居る。

左手を袷に、右手を筆筒に、頬杖突いた横顔の美しさ。彼女は何をか思煩ふ。

まだ真新しい白木の桐の、楮目正しい筆筒の上には、木地塗の針箱、蠟塗の鏡臺、手筆筒も置いてある。

店には骨ばかりの障子建具が、二三十枚も荒縄で縛つて、壁の際に立懸けてある。又、土足で踏荒したやうな、疵だらけの板敷には、道具箱がある、墨壺がある、匏がある、曲尺がある……。

と、何心なく見て行く内に、ふと目に留つたは、研澄した一挺の小刀である。女はふと、

『あゝ、あれで若し此の咽を突いたら、甚麼にか氣が晴々するだらう?』と思つた。

が、又、「若し良人が歸つて見て、私の體が氷のやうに冷たくなつて居たら、甚麼にか失望するだらう？」と思つた。

良人はいつも恚う言つてる。

「お前が若し病氣にでもなつて、死ぬやうな事でもあつたら、俺も屹度後から死ぬ。毎日々々同一家に居て、飯を食ふにも一緒に食ふ、茶を飲むにも一緒に呑む。寝るにも起きるにも、一緒に寝起きをしてゐて、日がな一日密着いて居てさへ、飽きもしず、飽かれもしない。

今の嬉しさに引易へて、もしお前が病氣にでもなつて死ぬやうな事でもあつたら、其時は何うしやうなんと、下らねえ事を、ふと此間も、お前の留守に考へたが………。逆も生きちやあ居られめえと思ふ。生きて居たつて滿らねえものな。

お前が長火鉢の前に坐つて、針仕事をさへして居てくれりやア、そして俺が仕事場に坐つてさへ居りやア、一日懸るものも一時間、十日懸るものも一日で出来上つて了ふ。自分ながら何うして恚うかと思ふ程、面白いやうに抄取るから不思議だ。何うして此の可愛い物を、むざむざと棺桶の中へなんで入れて、土の中へおツぱり込めるものか。

偶に近所へ使ひに行つて、家に居なくつてさへ、機嫌の好い顔を見ない内は、寂しくつて、仕事も何も手には付かねえ。真逆に廿歳廿五にもなつて居て、電車に轢かれやうたア思はないけれど、生きて居てさへそれだもの。死んだ時は何うしやう？今こそ恚う遣つて恍惚と、俺がお前の顔を覗き込んでる事も、何も知らねえで寝てるけれど、

「おい………」と一言呼びさへすりや、ソレその通りパツチリと目を開けてよ。優

しく莞爾と笑つてくれるんだもの……。

今夜も何故か變な事ばかり考へられて、若しか此の儘死んじまやしまいかと思ふ

と、心細くて仕方がなかつたもんだから、それで一寸起して見たのだ。」

と、昨夜も氣になる事を言つて居たが。噫、思へば、私ほど幸福な者はない。

とは思ふけれど、なつかしい。お嬢様がうらやましい……。

死に度くない！

殺し度い！

二人の寢込へ踏込んで、あの、鋭い、刃を掴んで、突殺して、もうやり度い……。

「お俵が参りました、御待遠様でございます。」

と云ふ、隣家で俵夫の聲がする。

女は何心なく店の間へ出て、障子の破れ目から覗いてゐる。

と、出て行くのは、美しい、露もしたゝるやうな靚装を疑した令嬢であつた……

尋ね人(一)

「婆や、突然妙な事を聞くが、お前はお小夜さんと云ふ女を知らないかね。」

と、机に向つて、舶來の厚硝子の鏡、ヤケにブラツシで、香油も塗けず、サツ／＼と頭髪を搔いて居た前島に不意に聞かれて、タオルを縁側の物乾棹へ乾して居た婆さんはギョツとした。

宛で自分の罪惡をでも、暴露された彼のやうな氣がしたからである。

そのお小夜は直ぐに居る。

が、然うと直ぐに言つて了つたなら、又何う云ふ災禍が、自分の身の上に振懸ら

ないものでもないと思つたので、たい、

『存じて居ります。』とそれだけ言つた。

前島は莞爾と微笑み、金口に火を付けながら、

『うむ、知つてるか、然うだらうねえ、俺も知つて居さうな顔だと思つた。そして、今は何處に居るね?』

婆は確と行詰つた。

而して、言つたものだらうか、言ふまいものだらうかと、良暫く躊躇して居たが、此の場合明ら様に言つて了つては、何を又意外な事を言ひ出されまいものでもないと思つたので、

『さア、何處に居りますか? 以前はよく存じて居りましたが、唯今は分りません。旦那様は、何うして又、あのお小夜さんを御存じなんで被在いますか?』

ど、此方から鎌をかけて見る。

『何有ね、一寸仔細があつて……』

ど、前島は又微笑んだが、

『言つて見やうか、』

『へい、何うぞ有仰つて下さいまし、』

ど、婆はおどくしながら言つた。が、内心少からず不安に耐へ兼ねて居る。前島は莞爾々々しながら、

『お前は大妙寺と云ふお寺を知つてるだらうね、』

『へい、存じて居ります。』

『あのお寺の山門に、足場の懸つてる事も知つてるな、』

『へい、存じて居ります。』

「和尚さんも知ってるね、」

「へい………」と婆は又ドギマギする。

「俺も實は知ってるんだよ、」

「は、然やうでございしますが、」と言つたが、

「大層、肥つた、大きな和尚さんで………」

「然うだよ、は、女の好きな、」

「それは何うか存じませんが、よくお庚申様の晩にお参詣に参りましたので………」

前島は又莞爾々々笑ひながら、

「然うか、彼寺の門前に蕎麥屋があつたな、」

「はい、ございました、」

「一寸旨く食はせる、」

「然やうく、」

「あの蕎麥屋で實は會つた事があるんだがね、」

「へえ………」と婆は引息になつた。が、

蕎麥屋へは初中終大妙寺へ、お小夜を送つての往復に寄つた事があるので、そんな事はもう忘れて了つて居る。

「忘れたかね、」

「はい、思ひ出せませんが………、何うして、旦那様は又、それを御存じなので………」

「は、は、」

と前島は活快に笑つたが、

「お前の行く處なら何處でも知てる。お小夜を彼寺へ連れてつたのもお前だらう、」
と、言はれて見れば秘し隠しもならず、

「へい………」

「悪い事は出来ないものだね、」

「全くでございます。」

と、婆は負惜みを言つた。が、照れ隠しに、「エへ、」と笑ひ出して、何とかして前島の心を讀まうとする。が、分らない。

尋ね人(二)

「實は、耻を言はなければ分らないが、今までにも折があつたら、聞かう」と思

つて居たんだ。が、つひその機會がなくて聞かずに居たんだが………」

「へい………」と婆は故とらしく馬鹿丁寧に言つた。

「知つてるなら教へて貰ひ度いんだが………」、實は恚ういふ處へ越して來たのも、何とかしてお小夜さんの居處を突留め度いと思つて來たのだ。

あの時……、と云つても最うお前さんは忘れてるらしいが、彼處の蕎麥屋で會つた時、お前の後を追駈れば可かつたと、後では非常に残念に思つたのだ。

けれども、それは、後で氣が付いた事で、眞逆にあれ限、お小夜さんが大妙寺へ來ないものとも思はず、亦行方が知れなくなるとも思はず、實は心待にして居たのだ。

けれどもあれ限、お小夜さんも來ない。又お前さんも、蕎麥屋へは來ないと言ふ。そのうち、然うだ、丁度お前さんに、大妙寺の蕎麥屋で會つた翌朝だ。故郷の養

母の世話になつてゐる家から電報が来て、養母が死んだと云ふ知らせがあつた。で、私は取る物も取敢へず、大妙寺を引拂つて、荷物は私の先生の内へ——つまり森山さんへ預け放しにして、私は故郷へ立つて了つたのだ。』

と云つて前島は何故か其當時を追想するものゝ如く、黯然として面を曇らせたが、『故郷に居る内もお小夜さんの事は氣に懸らないではなかつたが、何有歸れば直き分るだらうぐらゐに思つて、急いで葬ひを濟せて歸つて來ると、右の次第で、本當に惜しい事をして了つたと思つた。』

けれども、お寺の和尚さんを探へて、聞かれべき數ではなし、實は其前にも一度捜した事があるのだ。

それは私がまだ大學へ入つたばかりでね。友達と二人連で大騒ぎをやつて、此邊を捜した事があるのだ。

それはお小夜さんがまだ人の圍ひ者になつて居た時代だ。けれども蕎麥屋でお前さんに聞く處に依るともうそんな事は止めて了つて、何か變な商賣をしてると云ふ。こりやア何でも然う云ふ方面を、捜すに如くはないと思つたので、實は大分手を廻しても見たのだ。

又自分でも時折はそれとなく捜しても見た。

あゝいふ賣女でも對手にして饒舌つてる内には、何ういふ事で又お小夜さんの居處が知れまいものでもないと思つたので……今考へると随分馬鹿氣な話だが……。

處が薩張行方は分らない。

其内にお前さんが、娘さんの病氣に代つて、番町の方へ來てくれた始末で……。こりや此人に聞けば直ぐに知れるな、とは思つたが、何しろ外の事と違つて、女

の事ではあり、それに、蕎麥屋でも、唯た一度顔を見た限なので、果してお前さんか何うかも分らず、最初の内は疑つても居たのだ。

する内、あゝいふ事件も起つたので、お前さんとは仲違ひにもなり、つひ聞く機会も失つて了つたのだが……。

何うだらう、差支がなかつたら、何處に居るか教へて貰ひ度いものだが……。」と丁寧と言つた。

婆は頻りと考へて居たが、

「いえ、然う云ふ事なら申上げます、」と顔を上げた。

前島は喜ばしげに、

「知つてるかね、お、そりや可かつた。そして今何處に居るね？」

「畳入口で御覽遊ばしたでせう、あれが然うでございます。」

* * * * *

「お小夜さん、何をしてるの？、真暗にして、燈も何も點けないで、」

お小夜はハツとなつて我に返ると、直ぐに長火鉢の前から飛んで行つて、店の間の障子を開けた。

と、小母さんは上框へ、どツかと掛けて、

「やれ〜驚いた。真逆に家の、旦那様が、お前さんの事を知つて居やうとは思はなかつた。」

と言つてその一伍一什を話した。

「お前さんも知つてる方かね？」

と婆は濡手を拭いて居る。

お小夜は黙つて泣いてゐる。

「おや、泣いてるね、驚いた、何うしたの、こりや笑談ぢやあない。私は貴女に驕らせやうと思つたのだが……」

と婆は少しアテが脱れた。

お小夜は上櫃に蹲んだまゝ、兩袖を顔に押當て、可伶しくも處女のやうに泣いて居る。

婆さんは呆氣に取られて、

「何うしたの？ え？ お小夜さん……」

と言つたが、お小夜は唯、何にも言はず、

「それは私の義理の兄さんです。私のお母様のお葬ひを出して下さつた方です。」と言つた。

「あの方がね、へい……」

と呆れ返る。

其處へ令嬢が歸つて來た。

伶俐な目、清しい眉、何處に一つ欠點のない、才氣煥發とも云ふべきその容貌！

黒い髪を女優卷にして、女王のやうな金環を飾つてゐる。何處に一つ不調和な箇所もない、勝誇つたやうなその風俗！

彼女は今、音楽の先生から歸つて來たのであつた。

お小夜はその美に打たれない譯には行かなかつた。

「おや、お歸んなさいまし。」

と婆は立上つたが、令嬢は尻目にもかけず、スタ／＼と其前を通り抜けて行く。

告 げ 口 (一)

眞暗な、今にも降出しさうな、星一つ見えない物凄いな夜を、宛で馮物でもしたやうに、フラツカ〜と向島の土手を、彼方へ往つたり、此方へ來たりして居る一組の男女がある。

女と云ふのは、好加減な婆で、男と云ふのはまだ若い。婆は頻りと恚う言つてる。

『好いかね、よく分つたかね、私やア決して嘘は言はないよ。自分で媒介人までして置いて、恚麼事は言ひ度かないけれど、それが毎日なんだから遣り切れないぢやアないか。』

お前さん處のはお前さん處ので、然うやつて、お前さんさへ家に居なければ、毎日のやうに家へやつて來るし、又家の旦突は旦突で、立派なお嬢さんと云ふ許嫁のあから身で、そのお嬢さんも家へ歸して了つて、役所へも行かずに居る。あゝいふ處へ越して來たのも、今考へると申合せての上らしい。』

『えッ?』と若者は驚いたやうに言つた。彼はいよゝ得意になつて、

『その證據にや越して來る前、番町で恚麼事があつた。』

『番町ではお役所にも遠し、お前の近所に何處かないの? 私も此處ぢやあお友達も大勢居るし、思ふやうには伺へないし、お母様も喧ましいから、何處かい、處を捜しておくれよ。』と有仰つたから、私も何心なく、

『それぢやア恚うおしなさいまし、私の近所に是々の家が空いて居ます。彼處なら

旦那様のお役所にもお近し、』ッていふと、お嬢様は旦那様と目と目を見合せて

『まあ、いゝわね、あの邊なら、お兄い様もお嬉しいでせう……』と、變な事を有仰ると思つたが……、今思ふと確に然うだ。

何しろうちの嬢的までが、然うやつて、後押しなんだから遣切れないやね。

嬢的と来た日にやア、中々話せる女だからね。

此間も黙つて見てりやア、しやなりくと花魁の風をして、

『何う？ お兄い様、似て居て？』

なんて、裾を引摺つて——幾らか嫉妬もあつたらしいが——野郎殿を嬉しがらせてござる。

すると又野郎殿が、嬉しさうに涎を垂らして見て居たつけが、ま、餘程の深い御縁だと見えて、

『不思議な事にはそれは二葉の着て居た衣服だ、何うしてそんな物が見付かつたらう、』と云ふ譯……。

何しろお前さん、お前さん處のが、東京へ來ない前からの馴染らしいので、吉原に居た時の様子は素より、何から何までよく知つてお在なさる。

それが突然久しぶりで行會つたのだから耐らないやね。もう兩方で有頂天になつて了つて、些この間も別れちやア居られない。お前さんこそ好い面の皮さ。私も間へ入つて因つて了ふ。以前の商賣が商賣だからね。何だか私でも間へ入つて、お前さん處のに勧めでもしたやうで……。

私にや散々儲けのカスだから、お前さん處のに野心があつてでも、間を裂くやうに思つてくれては間違ふよ。

何有、私の手腕なもの。儲けやうとさへ思へば、うちのお嬢さんでだつて儲けて

見せる。

けれども何しろ今も言ふ通りの譯で、私も見ては居られないからさ。

出てお了ひ。でなきやア、出してお了ひ。その方が身の爲になるよ。

第一好い耻ッ搔ぢやないか。好い職人の癖にして。あゝいふ處へへタバリついて居て世の中にやア外に女でもないやうに。

女の方で追ン出て行かれて了つた後で、アツ失策つたと言つたつて追着かないぢやないか。もう然うなつちやア世間へ顔向けが出来なくなるよ。

町内で知らぬは亭主ばかりなり、なんて言はせ度くないからさ。
憤れつたいねえ、分らないねえ……。』

告 げ 口 (二)

男は又恠う言つた。

『もう分つたよ、可煩いな、幾度同じ事ばかり云つてるんだ。』

『へ、あれだもの、手が附けられない。そんなだからお前さんも、好い馬鹿にされるんぢやないか。』

『で、左に右歸つてくれ、お前に然うやつていつまでも後へばかり跟いて歩かれちやア、煩くて協やしない。緩り考へる餘地も何もありません。何しろ御深切は辱い。けれども、俺は聞き度くなかつたよ。聞かずに打遣られるのなら打遣られたかつた。其方が諦め可かつた。聞けば成程と思ひ當る事もないではない。けれどもそ

んな事は忘れて居たかつた。お前に言はれるまでは氣にも留めなかつた。けれども俺ア死ぬまでも、そんな事は考へ度くなかつた。情無い！ 残念だ！

俺だつて何も酔興に、あんな女を何うの憐うのと言ひ度くはなかつたのだ。けれど、何しろ獨り法師だと云ふし、爺様の死んだ事も知つてるし、親方が不承知を唱へるのも構はず、あゝやつてお前にさへ頼んだくらゐだ。そしてその爲には随分少からの金子も遣つて居る。後で聞きやアお小夜の手には、鏝一文だつて入つて居ない云ふが……………。

それさへそんな事は、あの女一人自由にした身代金だと思や惜しくもねえと忘れて了つて居たのだ。却つてお前を思に被て居たくらゐなのだ。それなのに、何も、そんな事を俺の前で言つてくれずとも可い。彼女に落度があるならあるで、何故其時氣を付けてくれなかつたのだ。お前が傍に居てくゝ氣を付けてくれなかつたの

だ。よし又眞實落度があつたにした處で、それを言つてくれるなア慈悲ぢやアねえ……………。

「ハッ、臭い物には蓋をしろツてのはお前さんの事だ。聞けば氣持が悪くなる、聞かねば知らぬが佛で濟んだ。とは又何てい意氣地なしたらう。私や是でも深切に、お前に恥を搔かせ度くないばかりに、密と教へて上げるんだよ。」

「もう、分つたよ、可煩いなア、お前は又そんな事を言つて、弱い女苛めなんぞをして、又儲け度い腹なんぢやないか。」

「手も附けられない。うんでれがんだから。お前さんが然う云ふお人好しだから、家ぢやア勝手な眞似をされてるんぢやないか。人が深切に教へてやりやア、反對に食つて懸りやがら。勝手にしろ、ヘナチヨコ野郎！」

と行懸ける。呼留めて、

「何を此の遣手婆ア！」

「何？」と振返つて、

「遣手とはよく言つたな？」

男は背後から、

「然うぢやアないか。吉原に居た時分から、悪い事の有りたけをして追ン出されやがつて、それから又煮染屋の小母さんと化け込んで……、手前の爲にやア、お小夜だつて、どのくらゐ辛い思ひをしたか知れはしねえ、」

「いひ、いひ、でもお前やよく覚えてるね。まだ親方が、りで居る内から、小母さんくど店へ來ちやア、お小夜さんを取持つてくれ、お小夜さんを取持つてくれ、嘆願んだ事は忘れやすまいね。ハ、ハ、生意氣を言ふ口で、手前の嬪の詮議でもしろ！ 出來めえ、然う云ふ意氣地なしたものの、だから好いやうに馬鹿にされて

るんだ。後で、小母さん、あの時は濟まなかつた、早くから氣が付けば、恁麼耻は搔かなくて濟んだのだ。なんて後悔はしツこなしたよ。デレスケ野郎奴、はい左様ならい」

と婆はスタく枕橋の方へ行く。

職人は黙つて腕組をしたまゝ、大河の水に臨んで、永い間イむで居たが、ふと傍を通る空俵を呼留めると、直ぐにそれに乗つて何處へか消えた。

木伊乃の説

其晩、勝次は、夜遅く歸つて來た。

が、何故かお小夜の機嫌の好い顔を見ると同時に、吻といふ息を吐いたらしかつ

た。

お小夜は直ぐに支度をして置いた、春慶塗の膳を持出すと、長火鉢の傍へ置いて、直ぐに銅壺へ一本つけて、勝次が一日の勞を撈つた。

いつも恚うするのが彼女の勤めであつた。

勝次は嬉しげにその一杯を傾けると、是も常にする如く、其日の出來事を落なく物語つた。

けれども婆に向島で會うた事ばかりは、何一言語らなかつた。

「お店の旦那が入れといふから、俺も一緒に入つて見たがな。

昔は大した都だつたとか云ふ、エヂプトとかの、塚穴から掘出したとか云ふ、赤土色になつた木乃伊を見て、俺ア思はずも涙が零れた。

何でもその木乃伊と云ふのは、博物館の番人の話で聞くと、千七百年とか經つた

昔の、エヂプトの何とか云ふ都の、身分の好いお姫様の死骸ださうでな。

片ツ方の硝子の中へ、別にして入れてあつた、彫刻物の蓋を見ると、繪に畫いたやうに綺麗なのだ。

而してその蓋を見て、又、今度は木伊乃の方の顔を見ると、目こそ鼻こそ落凹んではゐるけれど、成程然うかと思はれるのは、口元がまだ全然して居て、今にも何か言ひたさうで、その可愛いつたらありやしないのだ。

是も其の番人の話だが「何でもその頃のエヂプトといふ處ちや、人間の體なんてものは、一旦死には死んじやつても、體さへ大事にして、木乃伊にでもして藏つて置きさへすりや、死んでから三千年経てば、屹度舊の通りの體になつて生れ代る事が出来るものだ。けれども、穴へ埋めて了つたり、焼いたり盪かして了つたりしちや、生き返る事が出来ない。と云ふ事を信してゐるので、恚う遣つて木乃伊にした

のだ。だから身分の好い木伊乃ほど、なるだけ體を大事にするやうに、御覽なさい、
慙う遣つて、十重二十重に布がまいてある。現今も木伊乃を拵へやうと思へば、い
つ何時でも拵へる事が出来るけれど、其換り一個の木伊乃を拵へるのに、何うして
も三萬圓懸ると……。」

『まあ……』

『それから俺も聞いて見たのだ。ぢやア此の木伊乃のお姫さんも、是から後千三百
年経てば、矢張り舊のやうな體になれるんですかね。』ていと、『其はあてにならねえ
のさ。だがまあ然う言つたものなんだよ。』ツツ。

俺ア其れ聞いてがつかりした。甚麼に御身分の好い方でも、命ばかりや儘になる
もんぢやねえとな。

聞きや王様の血統だつたとか云ふ、此の木伊乃のお姫様だつて、那麼に手を懸け

て大事にして、三千年経つたら舊の體にして遣らうと思つて、木伊乃にして埋めて
置いたからつて、千七百年の後になりや、慙う遣つて掘出されて、お負に遙々西洋
からは、此の日本へ渡されてよ。是が木伊乃と云ふものでございか何かで、數多の
人に顔見られるんだもの。

あれがお上の博物館であればこそ、日當りの好い西洋間か何か當がはれて、豪氣
な厚硝子の箱ん中で、目張までして入れられて居るけれど、是が見世物でもあつて
見ねえ、大道の夜見世で切賣にされて居る、膾炙膾炙ぢやねえけれど、それこそ素ッ
裸か何かにされて、此處にあるのがお乳首で、此處にあるのがお臍でござい。か何
かで、大きに洋杖の尖で突つき散らされねえものでもねえ。

俺の女房も好い女だが、何うか慙うはされたくねえものだ。死ぬんなら盪けてく
れ。俺も一所に盪けて了ふ。惣じ姿を殘せばこそ、觀世物にもされるのだ。其方が

一層爽然して可い。

と思ひく博物館を出るとな、又、美術協會とか云ふ西洋館にな、繪だの、泥で拵へた人形だの、蒔繪だのがどつさり飾つてある處があるのだ。

旦那は、今日は特別だから、偶には恁處も見とくがいゝつてな、職人の私を喜ばせやうと思へばこそ、態々連れて入つて下すつたが……。」

裸 人 形

「中へ入るとな、皆な好い人ばかり居るのだ。此方人等のやうに印半纏を着た者なんざ、見やうたつて居やしねえや。

何の部屋も何の部屋も皆ぶつかりさうな人込で、何れも貴婦人令嬢だ。紳士とか先生とか旦那とか言はれるやうな人達ばかりだ。

俺ア極りが悪くつてな。旦那の蔭になつて隠れて行くと、旋て人形ばかりの部屋へ入つた。

其處へ入ると驚いたね。何しろお前、黒いんだの、白いんだの、大きいんだの、小さいんだの、泥だの、石だの、半身だの、顔ばかりだの、其がみんな素裸なのだ。

男も女も子供も居たつて。一番女が多かつたやうだ。

その女の裸人形がさ。皆随分不恰好なのだ。から見られた様ぢやねえや。

顔なんぞの貧さ加減と來た日にや、いつも此の近處を歩いてゐる、納豆屋の那の

婆さんのやうだ。

中には是はと思ふのも一つや二つはないでもなかつたが、何有其だつて公園の藝妓よ。

お店の旦那の話で聞くと、皆なモデルとかがあるんだつてな。

活きた女を傍に置いて、立たしたり、坐らしたり、横を向かしたり、寝かしたりして、それを皆先生達が、お手本にして拵へるんださうだ。

「ぢやア此通りのが居るんですかね」つて言ふと、「然うだ、雇はれて来るんだ」つさ。妙な商賣もあつたもので、男の前で素ッ裸になつて見せて、それでお飯を食べてるんださうだが。

俺も嬉しくつて耐らなかつたから、歸途に、博物館を出る時に見たやうな、那麽西洋人の銅像のやうな、人間と同じほどの大きさのを一つ、お前のも何とかして俺

も今の間に拵へて置きたいものだと思つたから、旦那に、

「那麽銅像を拵へるのには、幾らばかり懸りませうね」つたら、

「然うさな、先づ、四五萬圓も懸らうかね」

と言はれたにやア、俺も參つて了つた。

何しろ木伊乃より高くつくんだものな。

何うしたつて可いねえ。死んじまやそれまでだと思ふと、さアもう家が懸しくなつて、耐らなからうぢやないか。

いつか一度は死ぬ體だ。年紀順で行きや俺が六年、先へ死んで行かなくちやならねえ。一日恚う遣つて遊んで歩きや、一日お前の顔が少く見られる譯だ。

借てと云つても出来はしないが、高いやうでも銅像や木伊乃は、金子さへあれば幾らでも出来る。出来た處で、銅像や木伊乃ぢや、優しい言葉も懸けてはくれめえ。

木伊乃ちや形の残つて居るだけ、猶更悲しい思をするだらう。人間も活きたお前の體は、ざら其處等にある人形や繪のやうな女と違つて、縦令千兩萬兩積んでも、錢金づくちや出来さうもねえ身だ。お前はお前一人の體だ。多度はねえ大事の體だ。お負に是が俺の女房だ。自分一人の所有品だ。

お刺に淺草切つての美人だ。慈悲があつて情が深い。

こりや恚うしちや居られねえといふもので、實は旦那が驕らうつていふ晩飯も、「否もう其には及びません、方々見物をさせて頂きましただけで、澤山でございませ。御蔭で面白い思ひを致しました。お花見には毎年参りますが、那麽面白い處へ入つたのは、今度が臍の緒切つて始めてでございませ。御蔭で大層な學者になりました。いづれ又、其内に」

と斷つて、お前の顔が見たいばかりに、廣小路の角から別れて、すたく飛んで

歸つたくらゐのものだ。

難有いと思ひねえよ。俺も手前の深切は、死んでも忘れやしないけれど、手前も俺の深切を、忘れちや女房の冥利に盡きるせ。

何處の世にかお花見に行つて、お負に旦那が驕るつていふ、御馳走も何もフイにして、日が暮れたつてのに、仲へも透れず、途中で旨さうな天麩羅だと思つたから、買つて来たよと職人の癖に、言ふ奴があるものか。ハ、ハ、」と笑ひながら又向島の事を思ひ出して不快な顔をしたが……。

わづらひ

「道理で歸りが遅いと思つたんですの。」

でもまあ道を忘れずに、よく歸つて来て下すつてね。私やア心に濟まない事ばかりあるので、餘計嬉しいと思ひますよ。』と言はれて、

『何有、そりやアお互ひいつこだ。俺だつて何も十九や廿才の生息子と云ふぢやなし。散々道樂をし盡した果だ。』

そりや女のお前まへの身みになつたら、以前の事ことも何かの折せりには思ひ出されて、氣きになる事こともあるかも知れないが、何も自分が好き好んで、あんな商賣しょうばいをしたと云ふぢやなし、皆親みなおやの爲ためだから仕方しかたがねえ。そんな事は氣きに懸かけずと、まあ／＼些ちつとと氣きを浮う々くさして、酒さけの一杯いっぱいも呑のむと可いい。』

と云つて勝次かつじは杯さかづきをさした。

お小夜さよは嬉うれしさうに受取うけとつて、

『有難ありがたう、私わたしやもうそれを言いはれる度たびに、嬉うれしくて涙なみだが出てよ。』

何處どこの世よにかお前まへさん、私達わたしたちのやうな罪つみの深ふかい物ものを、そんなにまで言いつてくれるものがあるのですか。

何うせ二度どとは世よの中なかへ、生いきて出でられる身みではなし、お爺おぢいさんの言葉ことばのやうに、縁えんの下したの犬いぬのやうな、儂はかない私達わたしたちの身みの上うへなんですもの。お前まへさんのその言葉ことば一つで、漸だと生いきて居かられるくらゐなんですよ。』

と云つてお小夜さよはホロリとした。勝次かつじも何故なぜか目めを連踏しほたきながら、

『何を又また下くだらねえ事を言いつて泣なくのだ。俺おれだつて何も醉興すゐきやうに、好き好んでお前達まへたちのやうな女めを、(心地こころもちを悪わるくしては困こまるが)女房にようぼうにした譯わけぢやなし。親方おやかたが喧やかましかつたもんだから、淺草あさくさの觀音くわんおん様さまへ、寒井かんい日の願掛ねんがけをして、聖天しやうてん様さまへお百度ひゃくどを踏ふんで、雨あめが降ふらうが吹雪ふぶきかうが、あゝやつて、毎朝まいあさ々々、千束町ぢくまちまで通かよひつ通とほして、小僧こぞうや職人しよくにんの世話せわまでして、到頭たうとう女房にようぼうになつたんぢやあないか。』

唯一人のお母さんに亡なられ、續いてお爺さんにポツクリ死なれて、獨り法師の心細い折からとは云へ、何うしてお前にその心懸けがなくて、素ッ堅氣になんぞなれるもんか。

今ちや親方も我折れて居る。

本來ならまだ紅い物づくめで、井戸端へ出るのも極を悪がらなければならぬ齡だのに、手前が職人なものだから、お小夜も職人の女房らしく、木綿物で働いてる。白粉氣はなし、紅氣はなし、その換り臺所は整澤して、迂潤りしやうもんなら滑り轉びさう。

あれが以前のお小夜かと思ふと、宛で人が違つたやうだ。

お刺に字も書けるツてぢやないか。まあ可いさ、仕方がない。その換りウムと稼ぎねえよ。

と、言つてくれたのもつひ先達だ。

滿らの事をよくして、身でも病くしてくれては困るよ。

況して、商賣人が急に止めると、張り詰めて居た氣も急に緩んで、ガツくり煩ふ事もあるツていから、しツかりしなくちやア可けないよ。

『はい……………』

とお小夜は嬉し泣に泣いた。

親 友 (一)

その翌朝の事である。

『御免下さいまし、』と格子戸が開いたから、

「はい、誰方と、」お小夜は出て見ると、見馴れぬ立派な洋服扮装の紳士だったので、眩しげに上框へ坐ると、洗ひ髪の毛の頭を下げて、

「誰方様で御座いますか、」と又言つた。と、

「私は大井と云ふ者ですが、」

と、紳士はポケットから名刺を出して、

「貴女が高味お小夜さんで？」と聞いた。

「はい……………」と言つたが、名刺を見ると、法學士大井兼太としてある。

偕は前島の親友かと思つたが、

「何うぞ此方へ、穢苦しい處でございしますが、」

とお小夜は上へ上げる。直ぐに長火鉢の向うへ通して、美しい小切れを集めた、それもお小夜が丹精の、友禪の座蒲團を直す。

客は慇懃に會釋をして、

「始めまして、」

「お初に……………」

とお小夜も會釋する。

「實は、突然に伺ひましたのは、外の事でもございせんが、私は前島の親友で、」

「は、然やうで被在いますか、」

と、お小夜は細面な、清しい目に莞爾する。髪は上臍のやうに後背へ長く垂れて、襟の懸つた半纏を着て居る。

座敷は茶の間と店の二夕間限で、何處に是と云ふ粧飾もないが、隅から隅まで清らかに、何處から何處まで掃除が行届いて居る。

お小夜は、美しいしなやかな手附で、直ぐに吸子の蓋を取る。大井は金口に火を

付けて、それとなく四邊を見たが、何處にも主人らしい人も居ないので、

「お話をすれば長い事ですが、先づ更めてお禮を申し上げます。前島が今日の成功を致しましたも、皆貴女の御厚意ばかり、貴女があゝの厄介坊主の火放小僧をお救ひ下さつたに起因するのです。」

と、大井は堅くなればなる程、訖々として可笑な口調になる。

お小夜は莞爾して、

「如何致しまして、」と言つたが、有繋に嬉しさは面に溢れた。

「まあ、お茶をお一つ、」

「次に申上げねばなりませんのは、御両親のお悔みです。又東京の御養父のお悔みです。誠に残念な事をなさいました。然ぞお寂しからうと、前島も、蔭ながら御同情を申して居ります。」

實は、早くにからお悔みに上らなければならなかつたんでありますが、前島も修業中の身ではあり、旁々（と四邊を見廻はして）貴女の御住所を存じなかつたが爲に、自然申遅れまして、何とも申譯がないと、暮々も申して居りました。」

「いえ、如何致しまして、私こそ御卒業の御祝にも上りませんで、」とお小夜は愛想らしく言つた。

「實は今日御伺ひ致しましたのも、外の事ではないのであります。前島が故郷を立つ時、貴女のお母様から懇々も、貴女のお身の上に就いて御依頼を受けて居たのださうであります。その御依頼をも果さない内に、突然お母様はお亡なりになりましたやうな譯で、前島もそれに就いては、非常に残念がつて居ります次第で。」

と云つて大井はポケットから袱紗包みを出しかけたが、

「然し、御無事で、御結婚をもなすつたと云ふ事を伺ひまして、前島も始めて安心

致しましたやうな譯で、

と云つて、大井は又、袱紗包みの中から、古びた銀行の通帳を出したが——お小夜の長火鉢の傍へ差出すと、

「是は其節前島が、貴女のお母様からお預り申した、貴女の御財産ださうであります、いつまでも御預かり申して置くのは心苦しいとか云つて——實は此の通帳の使ひ道に就いても、前島は今日まで、非常に苦心致しましたやうな譯で、何とかして貴女の御身の上を……、イヤ、然う申しちや失禮ですが、何うか御察しを願ひます。」

お小夜は潜と涙を拭つた。

親友(二)

大井は又更まつて、

「で、貴女の御結婚に就きましても、前島は非常に喜んで、何かな御慶びの品を色々選定致しましたが……是と云ふ思ひ附の品もなかつたので……、甚だ失禮ではありまするが……、と、又別に奉書に包んで水引を懸けた物を出して、
「何うぞ是非御納め置きを願ひます。」
と前へ出した。

お小夜はチラと流盼に見た限、黙つて居た。が、やゝ有つて、
「自身に御伺ひ致します筈なのですが、一寸の事で又世間の誤解を招き度くもなし、

私なら自身も同様、兄弟のやうに懇意に致し居りますので、前島からも安心して、依頼を受けたやうな譯で、何うぞ悪しからず御思置の程を願ひます。』

と言はれて、お小夜は一寸顔色を變へたが、寂しく莞爾微笑んで、

「婚禮……と申しました處で、私風情のは御覽の通り、更つた媒人があつて、致しました婚禮と云ふではなし、云はゞ寂しい者同士の、寄合身上見たやうな物なんでございますから、故と御名代をお遣はしになるやうな、更つた事をなさらずとも、お宜しかつたのでございましたが……、御名刺を拜見致しましてからは、御當人にお目に懸りましたも同様、おなつかしう存じて居ります。

私風情と違ひまして、殿方の御親友は、兄弟にも増してお親しいものだとか聞きましたから、お初にお目に懸つたお客様にも、慙う云ふ我儘をも申上げるのでございますが。私は決して恩を賣る氣で、前島さんをお助け申した譯ではありません。

云はゞまだ本の子供心で、たい世の中の御制裁をお受け遊ばすのがお可哀さうなばつかりで、兩親に口添したまででございます。

ですから、恩だなんて然う云ふ事は、有仰つて下さらなくても宜しいのです。

それから又お故郷をお立ちになる時に、何う云ふ事を又母から御依頼致しましたかは存じませんが、それは私の知らない事なのでございます。

此品はまあ其方へお納め置を願ひます。

幸ひ私には、父の遺した、纒かばかりの遺産もございすし、別に食べるに困ると云ふ程でもありません。

それから又、今も申しましたやうな譯で、更まつてお祝を受けます程な、立派な御婚禮でもございせんから、何うか是も其方へ御納め置きを願ひます。

何も意地悪く旋を曲げて、そんな事を申す譯ではございませんが、それが本當な

んでございますもの。』

と笑つて、

「屹度何なんでございませう。前島さんは是を機會に、御婚禮を遊ばすんでございませう。森山さんには、大層お綺麗な、お嬢様が被在るさうでございますから。」

と、圖星を指されて大井は驚いたが、
「誠に御芽出度う存じます。お噂は初中終婆やさんから伺つて居りますが、何うか然う云ふ事はお氣に懸け遊ばずに、お心置なく御好きな方と、御婚禮を遊ばして下さいませと、有仰つて下さいませし。」

それで、お嬢様もまあ、ごんなにか、お喜びでございませう。前島さんのお心も、よく私には分つて居ります。蔭に私と云ふ引懸りが、今までにございましたばかりに、立派なお嫁御さんもお貰ひなされず、亦、お嬢さんも幾らか自暴氣味で、被在いま

したと伺ひましたが、然う云ふ御遠慮には及びません。

私はもう疾うから前島さんは、断念めて了つて居るのでございます。私の身分が身分でございますから、とても立派な醫學士なんぞの、夫人になれやふなご、大それた事は考へませんでした。

もう其事は母の遺骸を此方へ引取りました時分から考へて居たのでございます。けれども私にも御恩がございます。前島さんは私の母の遺骸を葬つて下さつた方です。私も其事に就きましては、一度お目に懸つて緩り御禮を申度いと存じて居りましたが、もう其事一つで私のお世話なんか、立派に償ひが出来て了つて居ります。何うぞお歸り遊ばしましたら、然う有仰つて頂き度う存じます。

母の罪は子に迄祟つて、到頭私と云ふものは、世間普通のお嬢さん方のやうに、楽しい無邪氣な處女時代もなく、社會から葬られて了ひました。

けれども、唯一つ私には楽しい嬉しい思出がございます。それは学校の往復には、包みを背負つてお目に懸つた事でございます。

又私が東京へ参ります時に、町端まで御送り下すつた事です。

けれども然う云ふ心地は、いつまでも續く物ではございません。

私の身分も身分なら、前島さんの御身分も御身分です。

世の中と云ふものは、みんな然う云ふ寂しい物なのでございます。

身分次第で何うでもなるのでございますから……。

ですが、是は、我儘です、愚痴です、誠に恐入りました。

御親友の貴方様には申譯がございません。つい、その、御心易だてに、申して見たばかりでございます。私が悪うございました。何うぞ前島さんには有仰らないで下さいまし……。

不斷は私もよく分つてるのでございます。私に致しました處で、私が光起さんなら、矢張り私には何うする事も出来ません。唯だ、可哀さうだと思つたばかりで、矢張り慙うして此品を返す外ありません。まあ何にも申しますまい。前島さんの御心地も、私にはよく分つて居ります。何うぞお歸りになりましたら、宜しくお禮を有仰つて頂きます。

けれども、矢張りお嬢様は可羨しい。然ぞお立派な御婚禮でございませうねえ。斷念めては居りまして、矢張り母の罪が憎まれて……。お母様にさへ、罪がなかつたらと……。

けれども、後の故郷の兩親の事を思ひますと、本當に可哀さうで、佛を怨む譯にも参りません。

父親は自殺同様に、身を亡ぼして了ひました。母親は、それでも光起さんの御心

付けで、餘生を全う致しましたが、それさへ自殺同様に、矢張り儂い病死を遂げました。

又、此方の父は父で、人の心を誤解致しましたばかりに、自分も悶え死に死んで了ひました。

誰しも罪の苦みは、自分で受けるものなのでございます。世間の男女に何の罪がございませう。それを知らずに故郷の両親を呪ふやうに……、吾子を呪ひ、他人をも、呪つた父にも罪はございましたが、死んだ時の姿を思ふと、矢張り可愛さうでなりません。

ですから誰を恨みやうもございません。

たい、恚う云ふ儂い運命に生れた、自分を恨むより外仕方がございません。

故郷を立つ時、町端れで御別れた限、居處もお知らせしなかつたものが、不思

議な處でお目に懸る事が出来て、それ限又お別れた限、お目に懸る事も出来なかつたものが、今度は又妙な寺で、チラとお姿をお見受けしたり、今又恚う云ふ變つた處で、お目に懸る事が出来たと云ふのも、何かの縁が然うするやうにも思はれないでもございせんが、然う思ふのも皆未練でございます。あゝ、矢張り愚痴でございませう。身の程を忘れた時の事でございます。

とんだ愚痴をお聞かせ申して、誠に申譯もございませんでした。

ようこそお尋ね下さいました。御深切は身に染みて、お嬉しう存じます。何うぞお歸りになりましたら、宜しく御禮を有仰つて頂き度う存じます。お嬢さんにも何うぞ宜しく。

そして、いつ御婚禮でございませうの？」

親友(三)

大井は腕を拱いたなり、黙然と嘆息して居たが、

「實は切迫詰つて居りますので……、」

「然うでせう……、よく中てましたでせう……、」

と、お小夜は晴やかに笑つたが……、

「そして何方で御婚禮でございますの？」

「それを云ふのは、些と……、夫人の方から……、」

「まあ、何てい方でせう、私が怒鳴り込みにでも行くと思つて被在るんでございませうかね、」

「矢張り女ですからな。貴女方の人格を、何う云ふ方とも存じませんものですから

……。前島の血統さへ、態々故郷へ手を廻して、檢べさせたくらゐですから……。」

「まあ……。」

「博士は一向そんな事には頓着なく、たゞ前島の人格をのみ信じて、血統も何も眼中には置いて居ませんが、夫人となると然うは行かんです。」

ですから他で見て居てもハラ／＼する事があります。

然う云ふ事で、もし前島の感情を害して、森山家へ反感を起されるやうな事でもあつたら、令嬢の運命は何うなるだらうと、氣遣はれる事もあるのですが……、果して前島の少年時代に、同棲して居た婦人のある事は知れて来る。次いで養父母の素性は分る。

博士が幾ら然う云ふ事は、問題にはならぬと云つても、夫人が頑として聞かぬの

で、令嬢は家出をする………。尤もその話の出道も大概人物は分つてゐるのですが、何しろ人の噂ですから、纒かな事でも尾緒を付けて、傳へられると云ふやうな譯で、一時は博士の信用をも失ひ、幾らか左遷の氣味もあつて、實は下谷の病院の方へも遷されたやうな始末なのですが。

何方かと云へば令嬢の方が、却つて、唯一の貴女の同情者なので、極力貴女を辯護する、又前島を辯護すると云ふもので、漸う怒りも解けた折柄、貴女の御住所も分つたやうな譯で……。

前島が此處へ越して來たと云ふのも、つまりは令嬢が主唱者なので、少しも早く貴女の御動靜を突止めない内は、問題の解決しやうもないのですから、

『いえ、よく分りました。何うぞそればかりは、御心配下さいませんやうに。いつ何時、假令何處で御婚禮を遊ばしませうとも、御安心を願ひます。』

ですが、此のお品は何うぞお持歸りを願ひます。恁う云ふ物を頂く譯がございませんから、

と云つたが、思ひ出したやうに、

『お、然う、御芽出度いその折からに、御祝儀に差上げ度いものもございませぬ、』

と、立つて、簞笥の小抽斗を開けて、

『是は私の幼少の時に、一緒に撮りました寫真でございませぬ。恁う云ふ物がございましては、私も心残りでございますし、又前島さんもお氣懸りでございませぬから、もう是限ふツつり何の御縁もないものだと思ひますやうに、私からお嬢様へお上げする事に致します。』

まあ是を御覽下すつても、お互ひに何の關係もなかつた事がお分りでございませ

う。

前島さんは中學生の制服を着て、私はお下げに結つて居ます。

是さへ御覽下されば、お嬢様の御両親だつて、屹度御安心を被成いませうよ。ほ、何方も罪のない顔をして居ますわねえ。」

とお小夜は寂しく笑つたが、

「失禮ながら此の通帳を見ると、額面も少からぬ金です、此の金子の行方が何うなりますか。」

と大井に言はれて、お小夜は開けて見やうともせず、

「それ程御持歸りになるのが御心苦しければ、その換り是を頂いて置きます。その寫真との交換には、丁度宜しうございませう。私の母の記念とも云ふべき品は、何一つとして残つては居りませんから。」

と云つて、母親が肉筆で處書を書いた半紙を手にとつた。
それには恚うある。

「東京淺草三筋町、藥種商高見健娘弓子」

「加賀金澤番場町、醫師梅田信吾娘弓子」

引越(一)

「ソレ、あれを御覽、……………、あれを御覽、出て行くだらう、お前さん處のが門口まで、送り出して、何うだらうまあ、あの御丁寧な挨拶は？」

ソレ、此方に向いた。彼方に向いた。おや〜一緒に行くらしい、然うぢやない、歸つて来た。

が、何うだらうまあ、あの上氣した顔は？お小夜さんもお小夜さんだ、晝日中ま
あ何てい事だらう。

宅ちやア私が睨んでるものだからね、自分の家へ引込んだんだよ。

だが、素性は争はれないもんだね。虫も殺さない顔をして。』

と、婆は入口の羽目板へピッタリと密着いて、頻りと勝次に説明して居る。

勝次も、憂はしげな面色しては、目引き袖引きされる度に、據無さうに羽目板
の角から、目ばかり出しては覗いて居たが、旋てお小夜が門口から引返す處までを
見て、吻といふ嘆息を吐いた。

と、婆は占めたと云ふやうな顔色をして、

『まあ、もう一度、家へお入り。態々仕事先迄呼出しに行つて済まなかつたけれど、
全くお前さんが可愛さうだと思つたからさ。』

と又家へ連れ込んで来て、

『何でも私の聞いたんぢやア、たいでも切れる譯に行くまいからと云ふので、お前
さんに手切の金子を出すつていふ相談をして居たらしいね。』

銀行の通帳か何かを、頻りとやつたり取つたりして居たやうだつたが、終ひにや
アお前さん處のが、何とか言つて返したやうだ。入らないとでも言つて歸したんだ
らうよ。

こりやア又、その譯さ。色男の金だものね、お小夜さんだつて取り難いさ。

何うも此頃家の嬢的も、旦那も何處へか行つて居ない。嬢的の行先は分つてるが、
旦那がさ、何うしたものだらうと思つてると、家に私が睨んで居たからだね。お前
さん處で構曳して居やうとは思はなかつた。その内には此家を引越すよ。そして屹
度私も出して丁ふよ。まあ黙つて見て居て御覽。然うすりや誰にも感付かれる氣遣

ひはないからね、』

『お嬢さんは何處へ行つてゐるんだ？』

と、勝次は氣のない聲で聞いた。

『邸さ、どうに屋敷へ歸つて了つてゐるんだあね、此處に居ちやあ、下られるばかりだからね、』

『旦那は一體何處へ行つてゐるんだね、』

『病院さ、屹度病院で寝泊りしてゐるんだあね、』

『道理で今日始めて見た、』

『何うだい、嘘は言ふまいぢやないか。何でも私の言ふ事をさへ聞いて、早くから了簡をさへ極めて置けば間違ひはないのさ。濟まないが、私は一寸自分の物を支度して、了ふからね。いつ何時でも出されてもいゝやうに、今の内に氣を定めて置か

ないと、眞逆の時に困つて了ふからね、』

と云つて婆は女中部屋の戸棚を開けて、衣服や何かの始末を始めたが、

『何でも今日の鹽梅ぢやア、私も長い事はなさうだ。恁麼事なら家にお在なさる時分から、睨んだりなんぞしなけりや可かつたと思ふが今更追着きしやしない。あゝ見えたつて私の世話した女だもの。私だつて然うくは黙つて見ても居られなかつたもんだから、自然邪魔扱ひにもされるやうになつたんだ。本當に馬鹿々々しいとは此事だ。』

と、云ひ／＼婆は柳行李の蓋を開けて、上の物を下へ入れたり、下の物を上へやつたりして見て居た。

勝次は茫然臺所の板敷に腰を掛けたなり、腰から煙草入を抜いて火を付けた。其處へヒョコリと入つて來た者がある。

見ると、それは二人の車夫だ。
駿河臺からでも来たものらしい。

引越(二)

「小母さん、今日は、」

「何うも暫く、」

「番町のお邸以來だね……………」

「アノ、一寸……………」

と婆は勝次を呼ぶと、勝次は慌て、女中部屋へ駆け上つて行く。

婆は直ぐに茶の間へ連れ出して、

「お前さんは此處においでよ。何だか少し様子が變だから、」

「よし〜、」

と茶の間へ坐ると、直ぐに出へ行つて、二人の車夫に、何やら頻りと低聲に囁いて居たが、又引返して来て、

「到頭來やがつた。案の定、お引越だ。金のある方ア氣が早いや。此方人等ぢやア然うは行かないが。恁麼事なら邪魔しなければ可かつた。思ふやうに會はせて上げれば可かつた。」と婆は苦々しげに呟いたが、

「御自分達はそれでも可いかも知れないが、此方こそ好い迷惑だ。勝ちやんお前は何うするね、此分ぢやア屹度何だよ、お前ん處のも長くは居ないね、」
「えッ？」

「覺悟するなら今の内だよ。」

「ちやア、小母さん、始めて可いかね、」

「江戸ッ子は氣が短いからね、」

と云ふ大聲が臺所から聞えて来る。

「何うも旦那様が然う有仰るものなら仕方がないさ、何一つ私の品つてある譯ぢやなし、」

と、此方からも大聲に怒鳴つて、婆は又出て行つたが、二人の半被が臺所に突立つて、今にも引越しの形付けを始めやうと身構へてる傍へ行くと、低聲に、

「あれだよ、借金取と云ふのは。何有、大した金ではないがね。旦那様がお滞らせ

なすつたんだとか云つて、待合から来て動かないのさ、」と言つたが、素より勝次には聞えなかつた。

「へえ、待合から、」

「大きな聲をおしでない、」

と婆は手眞似で制して、

「お前達はまだ知らないだらう、旦那様の入らつしやる處ていのは、柳橋の櫻家だアね、」

「だつて、待合の金子なんぞ……、」

「なア、おい、」

「然うよ、」

「遣付けッちまはうか、」

「笑談言つてやア可けない。」と留めて、

「でまあ然ういふ譯だからね、ヤワ〜とやつとくれ、その内には又私が可いやうに言つて返すから。」

「ぢや。」

「おい。」

「始めやうせ。」

「それ。」

と言ふと、宛で火事場へでも行つたやうに、障子を脱す、紙門を脱す。又、男には目もくれず、座敷の荷物を荷作りする。

二階へ上る者は二階へ上つて、切々とピアノを荷作りする。額面を卸す。卓子を始末する。

勝次は居るに居られなくなつて、出やうとすると、又婆は留めて、低聲に、

「今もいふ通りの譯だからね、確乎しなくつちやア可けないよ。今の内に確乎しないど、了ひにや寝首を搔かれるやうな事があるよ。可いかね、よく分つたかね。偉い人にやア叶はないからね。何しろお前さん、あの通り、お金があつて、學問があるど來てるから、何を悪い事しやうたつて自由だアね。私も今度といふ今度こそは本當に悔しい思ひをした。自分で散々世話をして、こんな處へまで引張つて來た人に、黙つて唐突に荷物を形付けに來られるなんて。尤も引越は明日ださうだがね、悔しいッたらありやしない。」

勝次は黙つて頷いた。が、スツと立つて、外へ出た。而して、勝手口から露地外へ出ると、突掛草履の爪先を立て、逃ぐるが如く我家の前を通り抜けた。

悪計

その晩、密と大妙寺の奥庭へ、忍び込んだ老女がある。頭には毫碌頭巾を冠つて、身には紬の半纏を着て居る。

和尚は頻りと經机に向つて、法華經に朱を入れて居た。が、「御前様……」と庭口から呼ばれて、

「何うしたい、巧く行つたか？」と微笑みながら顔を上げた。婆は畏る／＼上へ上つて、

「御蔭で巧く行きました。何うも始めの内は剛情で、何てつても本當にしませんでしたが、今日といふ今日すつかり畏にかゝつて了ひました。」

何うせ旦那のお越しなさるツて事は、其の前から大井と云ふ人物から、朝の内に言聞されて居たのでございますが。

丁度、其の人物が、歸りに、何う云ふ譯だつたかは存じませんが、お小夜さんの家へ寄りましたので、私もこりやあい、鹽梅だと思つて、先程電話で申上げましたやうに致して、スツカリ引導を渡してやつたのでございます。

然うすると、野郎殿も、スツカリ決心の臍を固めました。

「何うも然う云ふ譯ちや家のお小夜も長い事は落着いて家に居まい。旦那が越して了へば、直ぐ居なくなるのは知れて居る………」
「なんて悔しさうに言つとりましたかね、」

と笑つて、

「まあもう暫くの御我慢でございます。家の旦那が御婚禮さへして了へば、お小夜

さんだつて寂しくなる。勝次が又家へ歸つても、何となくつん／＼する。其處をつ
け込んで私が又、いゝやうに綾なして、屹度物にしてお目に懸けますから、其節は
又何うぞ宜しく……、』

『いゝとも、』

和尚は頷いて、

『あの女さへ手に入れば、男の手切金ぐらゐ出してやつてもいゝ。私もあの女に居
なくなられて了つてからは、もうはやこれ一年の餘にもなるが、寂しくて仕方がな
いでの……、』

『宜しうございます。あの娘にもそれを申してやりましたら、ごんなにか喜びませ
う。然うでなくつてさへ初中終御前様のお噂ばかり申して居るのでございます。』

『お客様も多勢あつたけれど、なんなお優しい旦那様はない』なんてね。

あの娘も實は心細い獨り身たものでございませうから、『御前様にお目に懸つて
ばかりは、何となくお父様にでも會つてるやうな氣がして、甘え度くて仕方がない
わ。』なんてね。

ボツと顔まで赧くして、宛で十六七の娘のやうな事を申して居りました。

まあ、もう暫くの御我慢でございます。何うぞそれまでお待ち下さいまして、
『いゝとも、すツかりお前に委せた以上は、私からは左や右うは言はぬ。何分宜
しくやつてくれ。』

『はい、もう、それは承知いたしました。』

自暴自棄

「俺アまア何だつて恁麼、恁麼馬鹿な處へ來てるのだらう？」

弗と目に留つたは金蒔繪した煌やかな衣衾に懸けた、紫縮緬の裯襦とか云ふもの。金屏風、友禪縮緬の衾、玉のやうな電気燈！

と見ると勝次は目を瞬つて、驚いた、驚いた。驚いたのは其ばかりでない。

傍らに添臥したるは、妻のお小夜と思の外、眞白き膚、眞黒き髪、夢る顔の美しさこそ似たれ。高島田に金糸懸けたる、白粉の香の馥郁たる。其さへあるに、雪なす玉の腕に纏ひし、燃ゆるやうなる緋縮緬は、洗髪のさらさらしたる、黒緇子の衿の瑩澤しき、お小夜が瀟洒なる寢衣姿とは、似ても似付かぬ媚かしいものであつた。

「蔑棒な、女房が隣家の旦那に惚れたつて、フン、何だ、馬鹿々々しい。生きた人間だから惚れもしやうし、又那の旦那だから惚れるのも無理はない。何を下らねえ

眞似してやがるんだ。亭主は亭主で大事にして、朝から晩まで那遣つて、那の空色で居て働いて居るのだ。旦那のやうな眞似の出来ないのは、此方が其だけ不足なのだ。恁麼馬鹿げた處へ來て、誰の女房とも定りもしねえ、恁麼者を傍に置いて、それで鬱憤を晴したと言つて、喜んで居る俺のやうな奴と、澄して本なんぞ讀んで居る、旦那のやうな先生と、ま、比べて見て何方が豪いと思ふ？！

悔しいが一目置く。生れ直してでも來なくつちやア、逆も俺ちや協ひこはねえ……。

「俺だつて何も同じ人間だから、幾ら職人だつて、學問さへすりや、西洋へ行かれねえ事アねえ。

憚ながら恁う見えても、學問こそねえけれど、隣りの旦那が東京一の學者なら俺だつて淺草一の職人だ。お店の十軒二十軒と、一手に引受けて仕事をしてるやう

な、職人が何處にある。

氣の弱い事を言ひなさんな。西洋へ行きたかつたら、今に俺もウムと金子を溜めて、連れてつて遣るから安心してろ。

金子が出来なきや此腕だ。日本一の親方に仕込まれた、此腕さへ持つて居りやア何處へ行つても食はれねえ事アねえ。負ぶつてでも連れてつて遣る。

昔は、孫悟空とか云ふ猿物でさへ——佐竹の講釋で聞いたんだが——雲に乗つて一夜の内に何千里とか飛歩いたてい事だ。況してや俺は人間だ。

何の、職人だつて建具屋だつて、一生懸命で行きたいとさへ思へば、行かれねえ事はねえ。

旦那が留學生とかにおんなすつて、今度御國の爲にロンドンとかへおいでなさりや、俺だつて建具職で一番、佛蘭西へでも何處へでも行つて見せる。な、その意

で働くのよ。』

と、那の時は行かれる意で、切々と鉋を使つてたのを見て、お小夜の奴ア喜びやがつて、

『濟まないく、濟まない、濟まない、堪忍して下さい、ね、勝ちやん、』なんて、何故か涙を流してやがつたが。否、考へると覺束ない話よ。

いつになつたら行かれる事かと思ふと、當がない、當がない、意氣地が無えと言はれたつて、職人ぢやあ仕方がねえ。

同じ人間と生れながら、生涯鉋と鋸で、木を削つて終る奴と、然う遣つて、お上の御用で、西洋へまでおいでなさらうと云ふ、結構な御身分の方も、お在なさるのかと思ふと、俺ア馬鹿々々しくつて話にならねえ。仕事も何も可厭になちつた。』と言つて鉋を抛り出したら、

「私やまア飛んだ事を言つて了つた。那樣事で仕事可厭になられて了つては、ま
あ義理ある貴方に申譯がない。」

と、取亂して泣いて居たが。

考へて見りやあ女房の奴にやあ一方ならねえ恩がある。

此頃達者になつたと云ふのも、那の女が何彼に付けて氣を注げてくれればこそで
又、景氣がよくなつたと云ふのも、那の女が家に居てくれればこそだ。

立派に學問の出来る人でさへ、惚れた女に添はれないからと云ふのが原因で、死
んで了つた例もある。俺なんぞなあ自分ぢやア東京一の女だらうと思つてたくら
の女を、那やつて自由にしてるのだ。此方や亭主だから爲方がない。勿體ないとは
思ふけれど、水仕事までさせてるのだ。

何の、間男の一人や二人、されたつて爲方がないかい。

可いや、まあ。何うせ、長い事は、お隣家にもお在なさらぬのだ。當分何でも好
きなやうにさせとくのだ。其方が喜ぶだらう。

喜ぶだらうと謂へば、あ、今歸つて遣つたら喜ぶだらうな。

雨は降るし、風は吹くし。此間も、勝さんさへ家に居てくれれば、何にも外の
事は考へないと言つて居たが……。

勝氣の癖に意氣地がなくて、一人で居ると、ガタリと云つても、直ぐにピクリと
すると云ふ弱蟲なんだから、恁麼晩にやあ猶の事……。

其に到頭鐵葉屋の女房さんも、悔しいくを言通しにして、昨夜死んだと云ふ事
だから、垣一重向うの家にやあ、まだ生々しい死骸も其儘になつてる筈……。

お母に亡なられて、子供もビイく泣くだらうし、幾ら何でもお經も上げやう。
お小夜がいつか見舞に行つた時に、

ないから俵を呼んでくれ。小島町だ。』

と飛乗つて、茶屋を出たのが一時過。

幌の中へも正面に吹込むで来る、篠付くやうな豪雨の中を、目の飛出るやうな高い賃金を拂つて、人ツ子一人通らない、小島町の我家へ歸つて来ると、露地から一目散に駆け込んで、頭髮の上の雫を切りながら、

「お小夜く〜」と呼んだが起きない。

素よりどうとツと云ふ雨……………

瀧のやうな軒の雫……………

聲が低かつたから聞えなかつたのであらうと、又、

「小夜、小夜!」と呼んだが起きない。

目敏いのに、はて不思議だ。それも廣いと云ふのではなし、二間しかない九尺二

間。聞えぬ筈はないのだが、待て〜勝手口の方へ廻つて見やうと、身を半めて、又瀧のやうに降る雨の中を、横手の露地へ飛込んで、戸を開けると難なく開いた。勝次は嬉しさうに飛び込み様、後から追掛けてでも来るやうに、吹込む雨をびつたり閉めて、がたり臺所へ飛上ると、障子にぼんやり灯明がさして居る。が、此中に寝て居る事かと思ふと、呼んでも起きてはくれなかつた、恨も何も忘れて了つて、又嬉しさうに颯と開けると、勝次は怒髪天を衝いた! お小夜の寢床は藻脱の殻だつたのである……………

誤 解

折しも雨はばつたり小止んで、お小夜と婆の聲がする。

「随分甚い降りでしたわね、私や最う怖くつて、居ても立つても居られなかつたんですもの、」

「然うでせうねえ、お一人ぢや、」

「でも、やつと少し落付きましたよ。』

「まア、最う暫く此處にいらつしやいよ、ね。其中には又雨も晴れて来るだらうし、眠くもなつて来るだらうから、然うしたらお歸んなさい。可哀想にね、一人ばつちで。私が行つて泊つて上げてても可いんだけど、恁麼晩には不信心だしね、それに最う、恁うやつて、悉皆荷作りまでしてあるのだから、いつ何時泥棒が入つて来ないものでもなしね、』

「然うですとも、それに場所が場所ですからね、私の家こそ取られる物も何もないけれど、』

「でも表は閉めて来たでせうね？」

「え、スツカリ戸締はして来ました。』

「二寸二階へ行つて御覧なさい……………」

「……………」

二階には前島の肖像が懸けてあるのである。婆はそれを見に行くと勧めたのである。

けれども、勝次は那樣事は知らない。

勝次はくるくると向鉢巻。研澄した一挺の小刀を、逆手に持つて、後ろに隠して密と家を忍び出した。

「成程、婆が言つた通りだ。今夜は吃度お小夜さんが家へ見えるに相違ない。そして旦那も歸るに相違ない。二階の雨戸を開けて置く。開いて居たら來てるものとお

思ひなさい。と云つて居たが、果して雨戸は開いてゐる。」

『よし。』と頷いて口に小刀。自分の家の羽目板へ、横にして引つ懸けてあつた、梯子を取ると、縦に取つて、隣家の廂へと立てかけた。

そして、魔ありて彼を導くものゝ如く、するゝと猿の如く駆け登つた。

遺 産

勝次は危く踏こらんとする處を、漸く出窓の敷居に掴つて、手摺を跨いで、縁へ入つた。

これより先、お小夜は、婆に導かれて、前島の肖像を見に上つて居たのである。勝次は突然、障子を開けると、

『あれえ！』

と云ふお小夜の聲がした。

その聲を聞くと同時に、勝次も嚇となつて逆氣上つて了つた。

勝次の目には、彼の等身大の肖像畫が、恰も實物の如く見えたのである。

『汝、よくも此の俺を馬鹿にしやがつたな！』

旦那が日本一の學者なら、俺だつて日本一の職人だ。相手に取つて不足はねえ。可愛い女房をむざむざ取られて、黙つてゐる俺と思ふか。生かして置いちやア爲にならねえ。

と勝次は滅多斬りに切り付けた。

肖像畫は滅茶々に斬苛まれたのである。

其途端、婆は、

『何をやるんだい?』と怒鳴つたが、そのまゝ恐ろしい物音がして、二階から轉げ落ちて了つた……。

そして、今度は、勝次はお小夜へ斬つて懸つた。

お小夜はひらりと身を交すと、眞白き腕、煌めく小刀、勝次の刃物を挽ぎ取らんと、組んづ、解れつ、身を急つたが、女力の叶はばこそ。髪さへ、鬢さへ、振り亂して、遂に男の膝に組み敷かれてしまつた。

美しきその黒髪は、絹糸のやうに纏れて勝次の手へ絡むで、お小夜はその薄紅を帯びた頬を、惨たらしくも疊へ摺付けられた。が、勝次が旋て振上ぐる刃の下に、エー、とその玲のやうな乳の下を掻き切られて了つた。

血は迸つて障子を染めた。又、疊へ流れた。

けれども、前島の疵だらけの肖像の顔は、冷やかに、黙して、それを見て居た。

その時、前島は丁度、東京で婚禮の式を了へて、箱根へ新婚旅行に出掛けてゐた。が、その夜不思議な夢を見た……。

それは、お小夜が、紅白の蓮の模様の付いた裃を着て、しよんぼり前島の枕元へ坐つた處であつた。

夜が明けると、女中が、廊下を急いで、大井からの、お小夜の死亡の報知の電報を持つて來た。

が、その母が新婚の夜に出奔をして出産した娘が、復た自分の新婚の夜に、縦令、弗としたそれは間違からとは云ひ條、計らずも殺されて了つたと云ふ事に就ては、前島も少なからず驚いてゐる。

けれども前島は、其の後、幾干もなく、故郷へ歸つて新たな梅田病院を建設し

た。

そして、其の資本金が、お小夜の母の遺産であつた事は云ふまでもない……

新婚の夜終

大正五年六月二十二日印刷
 大正五年六月二十五日發行
 大正五年七月十八日再版發行
 大正五年八月二十日參版發行
 大正八年四月十五日四版發行

新婚の夜奥付

定價壹圓

著者 孔雀園主人

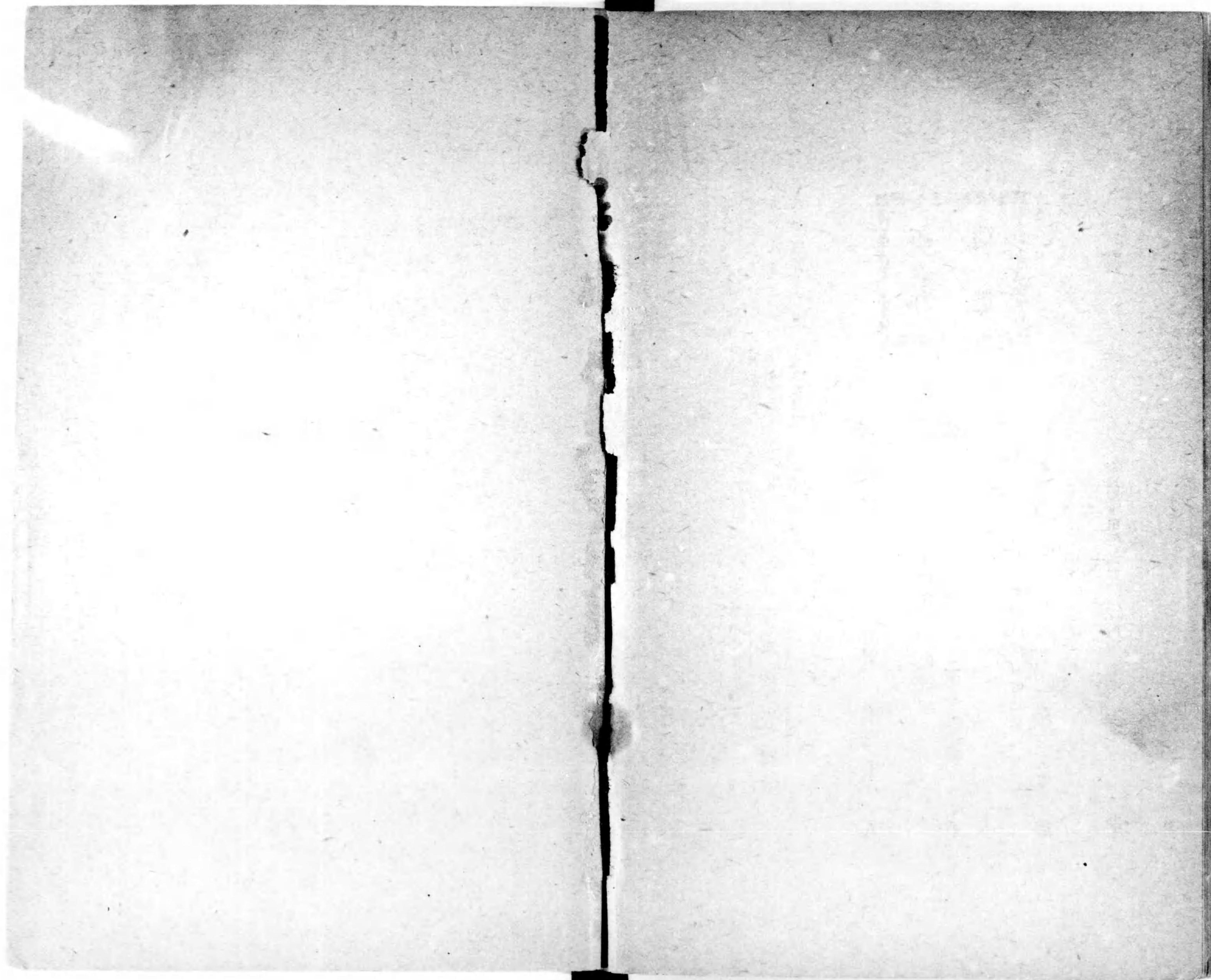
發行者 東京府下田端三二二 織原節子

印刷者 東京市芝區愛宕町二ノ一四 山内榮之進

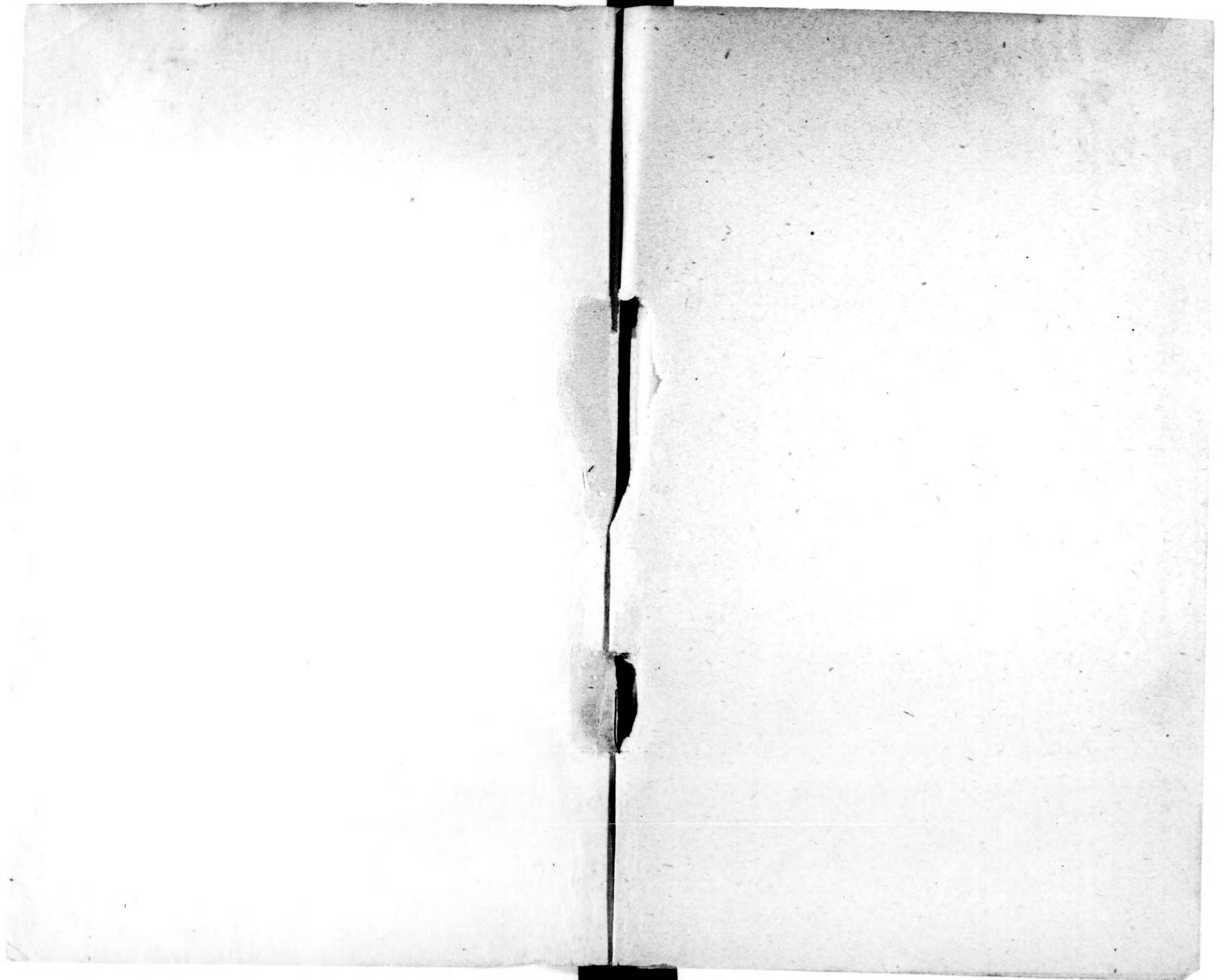


發行所

東京府下田端三二二 芳文堂



279
2



終

終

